撮影場所：富山県黒部市

「年輪」

今から 15 年程前の事になりますが、銀座に「ギルビー A」というバーが有り、そこに当時 101歳の現役のオーナーママさんがおられ、話題になった事が有りました。
名前は有馬秀子さんという方で、当時本が出たり、テレビにも時々出ておられ日本が超高齢化社会に向う頃でもあり、101歳で現役のママさんという事で世間の関心を集めたのかもしれません。
私もテレビで初めて知り、本を読んだ後、どうしても会ってみたくなりそのお店に行ってみました。
バーといっても昭和 28 年から続いている、小じんまりとした静かで上品な、歴史あるたたずまいのお店でした。
ドアを開けると入口の側のカウンターに小柄ながら気品の有る有馬さんが和服姿で座っておられました。
お会いして話をしたくて来ました、と自己紹介をしていろいろ質問をさせて頂きました。
当時私が 50 歳位で、有馬さんのお孫さんの年令とほぼ同じでした。
その時の会話の中で、「100歳過ぎると疲れますのよ」という言葉をおっしゃいました。
有馬さんの半分程しか生きてない私にとって、全く反論の余地の無い説得力の有る言葉として今でも鮮明に覚えています。
やはり何の道でも真剣に長くやってきた人、長く生きてきた人には、絶対かなわないと強烈に思ったものです。

また今から 15 年程前、故 谷沢永一先生（関西大学名誉教授）と故 渡部昇一先生（上智大学名誉教授）の共著で「菜根譚（さいこんたん）の裏を読む」という本が出ました。
菜根譚は洪自世（こうじせい）という人が書いた人生不遇の時に読むには大変勉強になる中国の古典ですが、この本を書いた時、洪自世は 50 歳前後の年令であった様です。
その菜根譚を、当時 80 代の谷沢先生と 70 代の渡部先生が解説される中で、納得して読んだのが、洪自世のこの言葉は納得出来るが、この言葉はまだ若いといったやりとりでした。
谷沢先生も渡部先生も知の巨人と言われる様な方で、多くの書物を読まれまた人生の御経験も深い方々で、そうした人からみて洪自世といえどもその 50 歳前後に書いた言葉には、まだ若く浅いと思われるところが有ったのかもしれません。

我々は悠久の歴史の中に生きて、個々の人生はせいぜい長い人でも 100 年程でしかありません。
しかしその限られた時間の中でも、やはり長く真剣に生きて初めて解る境地が有る様に思います。
今年 4 月 16 日徳真会グループは 37 年目の創業記念日を迎えました。
創業したのは 1981 年で私が 28 才の年でした。
36 年間、組織と共に生きて私も 65 歳になります。
ふり返ってみると、若く人生経験も乏しかったが由の失敗も多く有り、今だったらもっとこうしたのにと反省する事も多いのですが、 やはり、「年令の成せる技（わざ）」という事かと自分の中では思ったりもします。
「歳（よわい）65 にして 64 年の非を知る」という事かもしれません。
一方「憲政の神様」と言われた尾崎行雄（咢堂（がくどう））（1858 年～1954 年）は、95 歳で永眠する直前迄、現役の政治家として衆議院連続 25 回当選で、活躍した人物として有名ですが、95 歳の時に、「人生の本舞台は常に将来にあり」と書いておられます。
また「昨日まで ためせる事も 見し事も 明日の行く道の しるべなるべし」とも言っておられます。
我々は、年と共にこの様な年輪を重ねてゆきたいものです。

徳真会グループ
代表　松村 博史

渡部昇一先生は今年 4 月 17 日に他界されました。
先生には 2003 年 9 月一燈塾にて新潟で御講演たいだきました。
御冥福をお祈りいたします。